

災害情報をスマホで受信・確認後にテレビを視聴、 或いはテレビの視聴後にスマホを見る人の特性

○水野一成¹・近藤勢津子¹・吉良文夫¹

¹株式会社 NTT ドコモ モバイル社会研究所

1. はじめに

スマートフォン（以下スマホ）・ケータイを所有する人のうち、約9割がスマホとなり¹⁾多くの人がスマホを利用するようになった。スマホが普及したことにより、災害に関する情報が手軽な操作で、手に入るようになり、さらに「エリアメール・緊急速報メール」「防災系アプリ」等、プッシュ型で情報が手元に届くようになっている。

また、災害時のテレビ放送においても、詳細な情報はインターネットのウェブサイトから確認するよう、アナウンスされることも増えており、まさしく災害情報における、ネットと放送の融合の時代が到来している。

本稿の目的は、どれくらいの人が「スマホで災害情報を受信し、テレビを視聴する」あるいは「テレビで災害放送を見て、スマホで詳細情報を確認する」のか、またそのような行動をとる人の特性はどのようなものがあるか、調査を通じて解明していくこととする。

2. 調査概要

実査時期：2021年10月

調査方法：インターネット調査 サンプル数：9,072

調査エリア及び対象：全国 15-79歳

割付：（住民基本台帳に基づく）年代・性・都道府県

3. 分析方法

1. 単集計結果より

i) スマホで災害情報を受信・受信したことをきっかけにテレビを視聴したか

- A. テレビを視聴 68.6%
- B. テレビを視聴しない 14.3%
- C. スマホで災害情報の受信経験無 9.2%
- D. スマホを未所有 7.9%

ii) テレビで災害情報を視聴したことをきっかけにスマホを見たか

- A. スマホで情報を確認 52.4%
- B. スマホで情報を確認しない 39.3%
- C. テレビで災害情報の視聴経験無 3.3%
- D. テレビを視聴しない 5.0%

2. 単集計結果を元にクロス集計を行い、4つの群に分ける

i) 【双方型】スマホで受信・確認をきっかけにテレビを視聴、テレビの視聴をきっかけにスマホを確認

両方の行動を行う人

ii) 【スマホ型】テレビの視聴をきっかけにスマホを確認するがスマホをきっかけにテレビは見ない、もしくはテレビでは災害情報を見ない人

iii) 【テレビ型】スマホでの受信・確認をきっかけにテレビ視聴をするが、テレビ視聴からスマホはみない、もしくはスマホでは災害情報をみない人

iv) 【継続型】スマホでの受信・確認したことをきっかけにテレビをみない、もしくはテレビを視聴して災害情報を見た時はスマホで確認をしない詳細情報を確認しない

3.4 つの群の距離感を確認するため「数量化理論第Ⅱ類」を用いて分析する

4. 各群と説明変数間の調整済み残差を確認し、それぞれの群の特性をみる

4. 分析結果

1. 表1の通り、4つの群に分けた。双方型は約半数で構成比が最大の群となり、次いで「テレビ型」「継続型」「スマホ型」の順であった。なおクロス集計の際、この4つの群に当てはまらない8.2%は今回の分析から対象外とした。

2. 4つの群を目的変数とし、数量化理論第Ⅱ類を実施。判別率的中率は51.3%、1軸の相関比 η は0.41となり、図1の判別グラフを見ると、1軸は負の方向に傾き、他の群は正の方向に傾いている。また、2～4群の重なりは大きい。その結果、1軸は「1群：双方型」と「他の群」を分ける結果と考えた。なお、2軸及び3軸は相関比も低いことから、本稿では分析と対象としない。

表2ではそれぞれの群のカテゴリースコアの平均値を示している。負の値が大きい順に「1群：双方型」「2群：スマホ型」「3群：テレビ型」「4群：継続型」となった。この順を用い、相関係数を見ていくこととする。

3. 4つの群と説明変数間のクラメールの連関係数（表3）を見ると、係数が高い順に「（日々の）ICT利活用」「年代」「災害への備え」「気象リテラシー」「（日々の）テレビ視聴」「被災経験」「情報欲求志向」となり、「基本属性」だけではなく「防災意識」「ICT関連」「ライフスタイル」と多気に渡っていた。つまり「基本属性」

表1 目的変数の構成比

目的変数	サンプル数	構成比
1群 双方型	4,416	53.1%
2群 スマホ型	339	4.1%
3群 テレビ型	2,614	31.4%
4群 継続型	955	11.5%

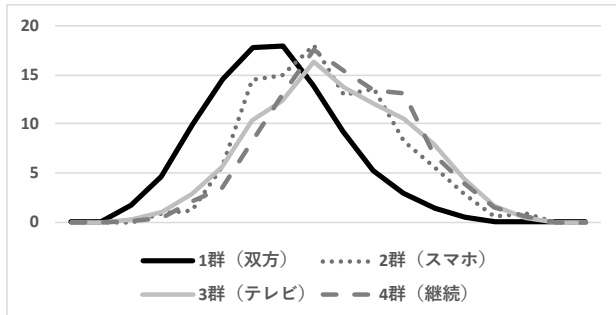


図1 判別グラフ

表2 各群のカテゴリースコアの平均・分散・標準偏差

	平均	分散	標準偏差
群1 (双方)	-0.39	0.75	0.86
群2 (テレビ)	0.32	0.79	0.89
群3 (スマホ)	0.42	0.98	0.99
群4 (継続)	0.52	0.82	0.91

だけでは、各群の特性を導き出すことは難しい。

最後に比較的相が強い項目を中心に調整済み残差を算出し、各群の特性みる。

1群：双方型は20-40代の割合が大きく、イノベータ得点²⁾及び情報志向²⁾が高い傾向が見られた。また、防災に関する変数がいずれも高く、防災意識が高い。さらにICT利用頻度も多い。

2群：スマホ型は、10~30代の割合が多く、イノベータ得点及び情報欲求志向が低い傾向が見られた。また、ICT利用頻度は高くなく、テレビ視聴頻度はかなり低い。防災意識に強い傾向は見られない。

3群：テレビ型は、60~70代の割合が多く、防災意識に関する変数がやや低い。またICT利用頻度が低い、テレビ視聴が多いわけではない。

4群：継続型は年代に特徴が見られなかった。情報欲求志向が低い。また防災意識も低い。ICT利用頻度も低い傾向が見られた。

5.考察

上述の分析結果より、3点考察した結果を記述する。

【1.テレビ・スマホ双方で情報を得る人の特性】

災害情報をテレビで視聴したことをきっかけに、スマホを確認する、またその反対の行動もとる人は全体の半数以上が属し、他の群と比べ、20~40代割合が多く、防災意識が高い傾向であり、ICT利用頻度が多い。この層はテレビ視聴をしながら、スマホで詳細な情報を確認しており、より多くの情報を手にしている可能性がある。

表3 目的変数と説明変数間の相関

アイテム名	クラメールの連関係数
ICT利活用	0.18
テレビ頻度	0.17
年代	0.14
被災経験	0.13
災害への備え	0.12
気象リテラシー	0.12
情報欲求志向	0.10
イノベータ得点	0.10
要支援者の有無	0.05
居住地の安全	0.03
都市規模	0.01
性	0.01

表4 説明変数でみる目的変数の特性

		双方	スマホ	テレビ	継続
属性	年代	20代~40代	10代~30代	60代~70代	
ライフスタイル	イノベータ得点	高	低		
	情報欲求志向	高	低		低
防災意識	気象リテラシー	高	やや低い	やや低い	低
	災害への備え	多		低	少
	被災経験	有			無
ICT/メディア	ICT利用頻度	多		少	少
	テレビ視聴頻度		少		

【2.シニア層の特性】

シニア層ではスマホの所有自体、他の年代と比較して低く（70代はスマホ所有62%、2021年1月モバイル社会研究所調べ）、所有していても十分活用できていないと言え難い。シニア層の割合が高かった「テレビ型」は決して情報欲求志向が低い訳ではなく、より詳細な情報が欲しくても得られていない状況ではないだろうか。

【3.居住地の安全と被災経験】

次に居住地の安全、被災経験（危険な目に遭った経験）に着目する。被災経験のある人は「双方型」の割合が多く、被災経験のない人は「継続型」が多い。ただし、居住地の安全に差異は見られない。このことから、過去の経験が今の情報行動の差を生まれている可能性がある。関連して防災意識の差も大きい。

最後に今回の調査・分析の限界点について述べる。当調査は実際に発生した災害を例に回答した訳ではない。災害の種類・規模によって、その行動は変化する可能性がある。また今後の分析の中で、情報行動と避難行動との関連についても進めていく予定である。

補注

1) NTTドコモ モバイル社会研究所ホームページ

(2021.11.2, <https://www.mobaken.jp/project/seniors/seniors20210526.html>)

2) 鮑戸弘(1987),社会調査ハンドブック,301-303

